**百段**

宇佐神宮境内の南側から上宮（上の社）へと続く大きな石の階段は、百段と呼ばれています。名前は「百の段がある階段」を意味しますが、この階段は99段しかありません。

伝説によれば、かつてある鬼が、宇佐神宮の主祭神である八幡神にお願いをして、人を食べる許可を求めたと言われています。八幡神と鬼は、もしも鬼が一晩で100段の石の階段を作ることができれば、鬼はその食欲を満たして良いという取り決めをしました。その仕事は不可能と思われたので、日の出間近になって、鬼がすでに99番目の段を造ったことに気づいた八幡神は驚きました。鬼が最後の段を完成させるのを防ぐために、八幡神は雄鶏を鳴かせて夜明けを告げました。そのため、99段しかないままで終わり、取引の条件は満たされませんでした。物語の別のバージョンでは、敵は水中に住む大きな蛇であり、自分の住処を菱形池まで拡大したいと八幡神に持ち掛けましたが、似たような方法で打ち負かされました。

元々の百段という階段は、宇佐神宮の昭和の大改修（1932〜1941年）の際に大理石を使って再建されましたが、伝説に合わせて99段のままにされました。同時期に、急な階段のふもとにある南大門という門が建設されました。現在、百段は安全対策のために閉じられており、参拝者は小椋山西側の通常のルートを通って上ってきます。お体が不自由な方やベビーカーをお持ちのご家族は、階段の下から上宮へ向かうモノレールを利用することができます。